

営農情報

第107号 平成23年5月16日発行

(水稲)

福岡大城農業協同組合
南筑後普及指導センター

最近の米は、登熟期の高温による背白や腹白などの乳白、及び充実不足が多くなり品質が低下しています。対策として、**田植時期を遅らせることが重要**です。

～ポイント～

- ◎田植予定日から逆算して、種子の浸漬日や播種日を決めます。
- ◎高品質米生産のため、**田植は6月20日以降**に行います。

1 移植時期が異なるヒノヒカリの収量、品質の違い

田植時期を遅くすると、出穂期・成熟期はやや遅れるが、千粒重や収量の低下はなく、玄米の性状（品質）は改善され、検査等級は上がる結果でした。

田植日	出穂期	成熟期	千粒重 (g)	10a 収量 (kg)	玄米の性状(%)			検査 等級
					心白	乳白	背白	
6月10日	8月23日	10月4日	23.4	545	5.0	2.5	2.9	2上
6月24日	8月30日	10月12日	23.3	565	3.5	0.9	1.3	1中

農総試 2001～2005年（2004年除く）の4ヵ年平均

2 種子消毒

(1) 種籾10kgあたり下記農薬の混合薬液20リットルを用い、24時間浸漬します。

薬剤名	使用濃度（種籾10kgあたり使用量）
テクリードCフロアブル	200倍（100ml）
スミチオン乳剤	1000倍（20ml）

(2) 浸漬中は薬液を2～3回かき混ぜ、全体に薬液がまわるようにします。

浸漬後はそのまま催芽します。

(3) 種子消毒に使用した薬液は、河川・クレーク等に絶対流さないでください。

3 浸種及び催芽

- (1) 種子消毒後、4～5日間浸種します。
- (2) 催芽（芽出し）の程度は、鳩胸程度～1mm位が適当です。また、種籾が酸素不足にならないように、**浸種中の水は毎日交換する**とともに、種子の芽出しをそろえるため上下を入れ替えます。
- (3) 浸種する場所は、発芽ムラや高温障害の原因になるため、直射日光が当たるところは避けてください。

4 播種及び出芽

- (1) **播種量は、苗箱当たり乾燥籾で約140～160g、催芽籾では約1.5～1.8合の薄播き**にします。
- (2) 播種時にかん水を兼ねて、苗箱20箱当たり水10リットル当たりタチガレエース液剤20ml（500倍）を混ぜて、かん注します。
- (3) 健苗育成及び育苗中の病害発生予防のため、**平床出芽を基本**として下さい。

<平床出芽を行う場合>

- ①日当たりの良い均平な場所にビニールを敷き、台木を並べます。
- ②その上に育苗箱を並べ、カンレイシャの二重掛けをします。
- ③苗丈が4～5cm程度（播種後7日程度）になったら、カンレイシャを一重にします。その後、苗の伸び具合を見ながら、5～7日程度経過したらカンレイシャを取り除きます。

<積み重ね出芽の場合>

- ①育苗箱を10段程度積み、さらに押さえ箱を置き、シートで覆います。さらにムシロ等で覆い、温度が35度以上に上がらないようにします。
- ②置く場所は、直射日光のあたるところは避けます（高温障害を受ける）。
- ③芽が1cm位に出そろい次第（約3日）平らなところへ広げ、カンレイシャを二重にかけ、緑化させます。
- ④緑化したら、カンレイシャを一重にし、苗の伸び具合を見ながら管理します。

- (4) 水管理は、カンレイシャ二重の期間は1日1回、カンレイシャ除去後は1日2～3回ジョロ等で十分かん水します。天候により乾きやすい場合があるので、十分注意しましょう。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！